（昭和37年3月12日
第三種郵便物認可）

令和６年１月10日

（第747号）

国民同胞

発行所
公益社団法人　国民文化研究会
（九州←→東京←→全国）
東京都渋谷区東1-13-1-402
振　替　00170-1-60507
電　話　03-5468-6230
ＦＡＸ　03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail:info@kokubunken.or.jp

月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料　年間2000円

「国の光を観る」

―政治家諸氏には、自身の心を照らす「国の光」を見出してもらひたい―

理事長　**小柳志乃夫**

昔、ある機縁で訪ねた漢学の老先生に、「観光」といふ言葉は「国の光を観る」といふのが本来の意味であると伺った記憶がある。

観光の話題は今もつきないが、多くはコロナ禍からの脱却や円安・物価安を背景とした外国人観光客の増加といった、観光業をめぐる経済的な文脈で話題とされることが多い。観光立国といふ言葉も経済政策的側面が強いやうである。

しかし、「国の光」といふ言葉には経済の領域を超えた高みと広がりがある。辞書では「国光」として、国家の栄光、一国の文化、国風といった意味が出てくる。日本人が古来大事にし、誇りとするものといふニュアンスがある。

昨年、以前から気になってゐた『逝きし世の面影』（渡辺京二著）といふ本を読んだ。幕末・明治の時代に来日した外国人たちの膨大な手記を丹念に集めた労作で、西洋の人々が当時の日本の風景やくらしをどう見たかが幅広く収められてゐる。その中には、当時の大らかで愉快で、親切で情に厚く、美しく清潔な庶民生活や当時の景色が活写されてゐる。

それらは所謂観光地を巡った記録ではないのだが、日本に滞在した多くの西洋人が当時の日本の「国の光」を観たのだった。そのほんのさはりだけ示すと、

「私は全ての持ち物を、ささやかなお金も含めて、鍵もかけずにおいていたが、一度たりとなくなったことはなかった」（ドイツ人宣教師）、「金持ちは高ぶらず、貧乏人は卑下しない。…ほんものの平等精神、われわれはみな、おなじ人間だと信じる心が、社会の隅々まで浸透している」（チェンバレン）、「日本の子供ほど行儀がよくて親切な子供はいない。日本の母親ほど辛抱強く愛情にとみ、子供につくす母親はいない」（モース）、「花好きと詩は日本においては分離できぬ車の両輪である」（シーボルト）。

こんな文章が次々と各章に出てくる。当時の西洋人の目に、日本の国は明らかに光ってみえたのだ。

一方で、当時、かうした西洋人の見方を否定したがる日本人がゐた。それが日本の知識人だった。「新日本の人々にとっては常に、自己の古い文化の真に合理的なものよりも、どんなに不合理でも新しい制度をほめてもらう方がはるかに大きい関心事なのです」（ベルツ）。

著者の渡辺京二氏は、西洋人を魅了した江戸時代に生まれた、日本人の生活の総体としての「文明」は、「明治末期にその滅亡がほぼ確認されていた」と記すのだが、同書の解説を書かれた平川祐弘氏はその末尾に、「その過去は私たちの心性の中で死に絶えてはいない。かすかに囁き続けるものがあるからこそ、過ぎし日の面影は懐かしいのである」とされてゐる。

今は「国の光」が見え難くなって、むしろ、日本の文化を壊し、家族を壊す働きが進んでゐて、これも知識人が主導してゐる（性同一性障害をめぐる最高裁の違憲判決など）。そこでは、幕末・明治の世に、西洋人が日本の光と見た「ほんものの平等精神」も、「子供につくす母親」も、「自己の古い文化の真に合理的なもの」も見向きもされない。文化破壊の知識人にとっては、占領下に日本を再び脅威としないために制定された日本国憲法が「国の光」なのだらう。

日本人が大切にしてきた「国の光」を確認することこそ、日本人の教育の柱となるべきものである。それは、国語、歴史、道徳、芸術などの多くの教科に及ばう。小学唱歌などは「過ぎし日の面影」を伝へてゐて、子供の心に父祖の声を「囁き続ける」のではないか。

目下、国政の世界は混迷状況にあるが、政治家諸氏には目線を高くして、自身の心を照らす「国の光」を見出してもらひたい。手前味噌になるが、昨秋刊行した当会編著の『歴代天皇の御製集』（致知出版社）も、まさに「国の光」を確認する栞になりうるもので、二千有余年の国史を貫く光がそこにある。

「国の光を観る」ところから、目先の経済政策や政局に止まらない本来の国策への道と情熱が生み出されるのではないか。